

氏名（本籍）	清水 聖志人（東京都）
学位の種類	博士（スポーツ科学）
学位記番号	甲 第 24 号
学位授与日	平成29（2017）年3月17日
学位授与の要件	大阪体育大学大学院学位規程第4条第1項該当
研究科名	スポーツ科学研究科（博士後期課程）スポーツ科学専攻
論文題目	トップレベル競技者におけるライフスキルとキャリア形成の関連：レスリング競技者を対象として
審査委員	主査 教授 土屋 裕 睦 副査 教授 荒木 雅 信 教授 岡村 浩 嗣

論文内容の要旨

本研究の目的は、高度レベルにて競技を行うアスリートを対象としたライフスキル（以下、LS）を活用したキャリア形成プログラムの開発を行い、その効果を検討することであった。具体的には、大学生のトップレベルレスリング競技者及び大学を卒業したレスリング競技者を対象としてそれぞれ4年間に渡る縦断調査を行い、LSの獲得過程及びライフスキルとキャリア形成の関連について明らかにしたうえで、キャリア形成プログラムを開発し、ユース年代のトップレベルレスリング競技者にプログラムの受講機会を提供することでその介入効果を実証的に検討した。

本研究にて得られた結果は、以下に整理された。

第2章では、大学生アスリートの入学時点から卒業時点まで計5時点の縦断調査を実施した。本調査より大学運動部における高度な競技活動により、LSを獲得していることに加え、LSの中でも「目標設定」に

においてキャリアイベント（大学から社会への移行）への「対処レベル高群」と「対処レベル低群」の得点差が学年全体を通じて顕著であるという知見が得られた。

第3章においては、学生トップアスリートの卒業後4年間に渡りLS獲得レベルの変動、雇用状態の推移、最終希望職獲得の動向についてモニタリングを行った。その結果、大学卒業後のキャリア形成の実態に加え、LSのレベルの変動、及び同レベルの高低と大学卒業後の長期に渡るキャリア形成との関連の一端を示すとともに、以下の知見を得ることができた。1)卒業時点にて正規雇用を獲得している者は21名中7名(33%)しかいないものの、卒業から4年後には17名(81%)が正規雇用を獲得していた。2)大学卒業時点にて最終希望職を獲得していたのは21名中6名(29%)であった。3)大学卒業後、LSのレベルは大きく変動せず、LSは競技引退後のキャリア形成を支えていることが示唆された。4)大学卒業後の雇用状態及び最終希望職の獲得と主要LS(目標設定、考える力、最善の努力)は、正に関連することが示唆された。

第4章においては、第2章と第3章の知見に加え、先行研究の結果からLSの中でも「目標設定」を中心としたプログラムを開発し、ユース世代のトップレベルレスリング競技者に介入することでその効果の検証を試みた。その結果、「目標設定」に着目すると育成キャンプを通じて平均値が有意に向上していたのは女子ジュニア世代のみであった。しかしながら、男子ジュニア世代では平均値が向上しており、女子カデット世代においても若干ではあるが平均値が向上していた。男女におけるカデット世代、ジュニア世代ともに、全体的に介入群の方がLSの獲得レベルは高く、「考える力」等の特定の側面では有意差が認められた。このことから、前年度に実施された育成キャンプのLS獲得における効果は、一定の期間を経ても維持されている可能性が示唆された。

以上を基に、結論としては、キャリア形成とLSの中でも「目標設定」とは、密接にかかわるという新たな知見が得られ、先行研究においては、「目標設定」と競技成績との正の相関が明らかにされていることから、「目標設定」を中心としたキャリア形成プログラムは、キャリア形成と競技成績の双方に有益である可能性が考えられた。またユース世代のトップレベルレスリング競技者を対象として「目標設定」を中心としたプログラムを導入したところ、男女における4世代において、事前事後のLSデータを比較したところ概ね平均値が向上しているという結果が示された。加えて、プログラム介入から約1年後における中期的な介入効果測定においては、男女におけるカデット世代、ジュニア世代ともに、全体的に介入群の方がLSの獲得レベルは高く、「考える力」等の特定の側面では有意差が認められ、プログラムの介入効果は一定の期間を経ても維持されている可能性が示唆された。

LSを獲得することによってキャリア形成の不応の「予防」に役立つと考えられるものであり、本研究の結果から得られる知見は、トップレベル競技者のLS獲得へ向けた効果的な教育実践への示唆を提供してくれるものと期待された。

審査結果の要旨

(論文審査)

本研究の目的は、トップレベル競技者におけるライフスキル (LS) とキャリア形成の関連を検討し、アスリートを対象としたライフスキルを活用したキャリア形成プログラムを開発することであった。そのため大学生のトップレベルレスリング競技者男子 30 名及び大学を卒業したレスリング競技者男子 24 名の 2 群を対象として、それぞれ 4 年間に渡る縦断調査を行い、LS の獲得過程及び LS とキャリア形成の関連について検討した。

加えて、本研究の知見を基に構成されたプログラムを、ユース年代のトップレベルレスリング競技者 (男子 90 名、女子 49 名 : 計 139 名) に提供することで、その介入効果を実証的に検討した。本研究にて得られた結果は以下の 3 点であった。

1) 大学生アスリートの入学時点から卒業時点まで計 5 時点の縦断調査を実施したところ、大学運動部における高度な競技活動により、LS を獲得していることを確認した。

2) 大学生トップアスリートの卒業後 4 年間に渡り縦断調査を行った結果、大学卒業後 LS 獲得のレベルは大きく変動せず、ライフスキルは競技引退後のキャリア形成を支えていることが示唆された。大学卒業後の雇用状態及び最終希望職の獲得と主要な LS (目標設定、考える力、最善の努力) は、正の関連性のあることが示された。

3) これらの知見を踏まえ LS の中でも「目標設定」を中心としたプログラムを開発し、ユース世代のトップレベルレスリング競技者に提供した結果、プログラム実施後に LS 得点の向上が認められ、ここで開発された教育プログラムが LS 獲得に有効であることを確認した。

論文審査の結果、これまで明らかにされてこなかったトップレベル選手の LS の獲得過程を縦断的に検討し、さらに就職状況との関係を検討したこと、さらにジュニアトップレベルキャンプにおいて LS 獲得のための教育プログラムを開発したことが評価された。

また理論と実践の往還を図るため、調査研究と介入研究を組み合わせていることも独創性があると評価された。

(最終試験)

提出論文をもとに、関連する事柄及び発表会での質疑に対する応答の内容を中心に、口頭試問を行った。具体的には、①トップアスリートの特徴 (一般のアスリートとの比較データ)、②教育プログラムにおける効果検討方法、③性差、等について質問したところ、先行研究に基づき的確な回答があり、提出された論文においても適切に修正がなされていることを確認した。また関連する事項についても十分な回答がなされた。

以上から、博士の学位授与の基準を満たしていると判断されたので、合格と判定した。